

昭和 SPレコードで迎れば

満州国建設

SPレコード収集家 ■ 城内 實

有名な藤本二三吉が吹き込んでおり、堀内敬三が作曲を担当している。

過ぎし日露の戦いに

勇士の骨を埋めたる

忠魂塔を仰ぎ見よ
赤き血潮に色染めし
夕日をあげて空高く
千里曠野に聳えたり

(以上、徳山の一番の歌詩)
昭和六年十一月には無産政党の社会民衆党までが、「日本国民大衆の生存圏確保のため満州事変は正当化されうる」という論法で満州事変支持を党中央委員会で決議する有様であった。

また、昭和七年一月には、当時の新聞界をリードしていた朝日新聞社の選定、制作により、「満州行進曲」という曲が時局に便乗した形で大手の日本ビクターから発売された。A面には

昭和六年九月十八日午後十時半頃、奉天北方約八キロの柳条湖において満鉄路線が爆破された。この事件は、関東軍高級参谋板垣征四郎大佐の下で石原莞爾中佐が入念に計画した謀略工

もう一つ当時の国民世論を引き寄せた事件として、昭和六年六月の興安嶺での中村大尉事件があげられる。これは、参謀本部の中村震太郎大尉と予備役の井杉延太郎曹長が兵要地誌調査のため満州・洮南地方を旅行中に、屯墾軍第三軍團長閻玉衡に捕らえられ惨殺されるという事件である。ただ、当時の満州は、国民政府の下部組織、張学良軍、共産主義系匪賊が跋扈している

（裏面は「満蒙ぶし」というレコードを臨時に発売している。また、比較的マイナーなレコードであるが、太平レコードも十一月に「噫中村大尉」という同じ題名の曲を出している。）

(二)

作であつたことは周知の事実である。ただ、当時の満州は、国民政府の下部組織、張学良軍、共産主義系匪賊が跋扈している無秩序状態にあり、中国全土で排日侮日運動は最高点に達していった。そうした状況の中で、現地の関東軍が本国の意向を無視してこのような「暴挙」に出たという背景があることも忘れてはならない。

その証拠にレコードの世界でも日東という老舗のレコード会社が同年九月に「噫中村大尉」

（一）

「満州行進曲」という曲が時局に便乗した形になってしまった。その後押しする形になってしまった。

昭和七年三月には、溥儀を執政とする民主共和制の満州國の建国が宣言された。この満州國は当時の犬養内閣では承認され

「満州行進曲」の歌詞からも、当時の大衆の満州に対する思い入れが容易に想像できる。

(四)

生命線はここにあり

八千万の はらからると
ともに守らん 滿州を

(以上、藤本の三番の歌詩)

ず、五・一五事件後に成立した斎藤実内閣でようやく承認された。すなわち、同年八月に軍人の武藤信義が初代満州国特命全権大使兼関東軍司令官兼関東長官となり、九月には日満議定書が調印され、五族協和（漢満蒙鮮日）をスローガンにした特異な「國家」が成立した。

に移行し、溥儀は皇帝となつた。
そして、翌十年四月には、皇帝
溥儀がわが国を公式訪問し、昭
和天皇と対等な立場で会つてい
る。

この溥儀の訪日を記念して日本ビクターから「満州国皇帝陛下奉迎歌」が徳山璉、四家文子のコンビの歌で発売された。一番の歌詩は次のとおりである。

「我等のテナー」として戦前活躍した藤原義江も昭和七年十二月に「討匪行」という曲を自ら作曲し、大陸への思いを日本

夕夕に吹き込んで
どこまで続く泥濘ぞ

三日一夜を食もなく

雨振りしぶく鉄かぶと
(中略)

文二

敵にはあれど遺骸に
花を手向けてねんご

興安嶺よいざさらば

亞細亞に國す吾日本

王師ひとつたび行くところ
満蒙の闇晴れ渡る

(五)

昭和九年三月に満州国は帝政

天 地 內
新 滿 州
頂 天 立 地 便 之 新 天 地
造 成 我 國 家 無 苦 無 慮
並 無 怨 仇 只 有 親 愛
人 民 三 千 萬 人 民 三 千 萬

裏面にはこのころ制定された「満州国国歌」を徳山璉が満語

日満しんは
慶び溢るる　日本のこの歌
供え奉れ　高らかにいざ

桜花 渡れし
麗らよ 今日の日
ひつべし ぜんり

國を挙ぞり　迎え奉れ
燐たり　聖駕に

のコンビの歌で発売された。一

本ビクターから「満州国皇帝陛下奉迎歌」が徳山璉、四家文子

この溥儀の訪日を記念して日

る。

和天皇と対等な立場で会つて、
済儀がわが国を公式訪問し、昭

に移行し、溥儀は皇帝となつた
そして、翌十年四月には、皇帝

(六)

手元にもう一枚満州国国歌のレコードがある。このレコードは当時の満州の首都新京で制作された稀少盤であり、歌詞が日本ビクターのものとは異なっている。調べてみたところ、昭和十七年九月に新京にて満州建国十周年慶祝典が挙行され、その機会に新たに制定された国歌で

されると日満語同時の齊唱が吹き込まれている。ここでは日本語の歌詩を紹介する。

昭和二十年八月には終戦を迎えたので、この国歌は三年ともたなかつたことになる。満州国それ自体と同様、はかない運命であつた。今回久々にレコードに針を落としてみたところ、大変もの悲しい曲に聞こえた。

